

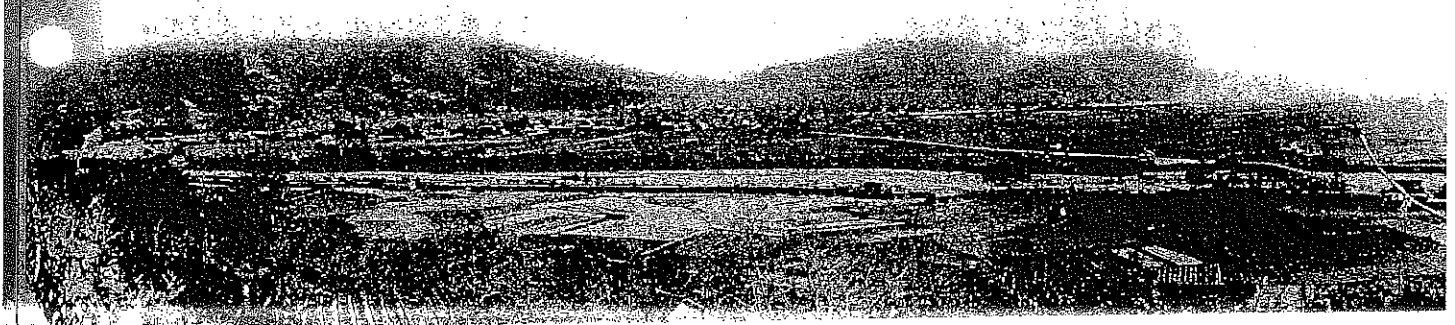
広郷土史研究会

会報

第94号

事務局 呉市広公民館内
〒737-0706 広古新開2丁目1-4
電話(0823)71-0706 FAX 73-5304
発行 平成21年11月7日
広郷土史研究会編集委員会

広村 400 町余歩の新開遠景



大正10年(1921)に大広の初崎神社山、頂上境内辺りから撮影された広村新開全景。中央に流れる川は広西大川で右下に架かる橋が常磐橋。当時の県道が仁方につづく。川向こうの新開は左から古新開・文化新開・多賀谷新開とつづき中央の家並は多賀谷橋からの商店街で、その向こうが中新開と大新開になる。明治17年の台風で新開の堤防が全て壊れ3尺の海水に浸かり400町の農作物は皆枯れた。ただちに堤防修復工事にかかったが竣工が翌年6月までかかりその為2年間耕作ができず広村民が飢えに苦しむ状況に陥った。この台風は庄屋多賀谷家の没落のきっかけとなった。「広村視察記(本文参照)に広村多賀谷家は順次傾いてやがて倒れた」と記述されている。耕地は潮抜きに手間取ったが、潮に強い甘藍(キャベツ)の導入もあり広村は蘇った。甘藍栽培の最盛期(大正~昭和初期)には260町余歩も作づけされ新開の65%に達した。これら野菜は呉海軍工廠に納入され莫大な収益を収め広村の発展の礎となった。

(写真提供 嵯本 正士 氏 文責 上河内 良平)

目次	
広甘藍(カンラン)事始考	上河内 良平・・・3頁
ひろ地名の由来と広大新開築調経過研究	小栗 康治・・・12頁
古文書部会・例会報告	吉田 顕治・・・2頁・20頁

広「甘藍(カンラン)」事始考

甘藍とは俗に言うキャベツのことで広村栽培のルーツを探る

上河内 良平

はじめに

戦前の広村では甘藍栽培が盛んに行われ、広村名産として全国にその名が知れ渡り、その栽培技術を視察に来村する農業従事者が後を絶たない状況があった。この甘藍とは俗に言うキャベツのことで明治後期～大正・昭和期にかけて、明治22年呉市に開闢され順次拡張されて行った呉海軍工廠へ近郊蔬菜としてひっぱりだこのごとく納入され莫大な利益を上げていた。

また全国市場にも流通し競争を勝ち得た甘藍はこれまで農業関係者等の研究対象として取り上げられ各誌に記事が掲載されて来たが(注1)、この甘藍が何時から生産されるようになったかと言うことほどの記事にも明らかにされていない。

そこでこの項ではこの甘藍がどのようにして広村に入ってきたか『甘藍事始』の1点に絞って考察しておきたい。

明治期の広村と村政の破綻

広村は江戸時代初期よりそれまで黒瀬川の沖積地としての干潟を順次干拓して行き嘉永3年(1850)の広村地図(黒瀬沖中家文書)に描かれているように、この頃ほぼ現在の形に形成された。ただ形状はほぼ同じでも当時の新開は、満潮時海面下平均1mで堤防が破壊するとすぐさま被害を被る軟弱な農地であった。しかしながらこれによって古地、1500石。新開地、1500石。合わせると3000石もの近隣に比類なき大村に発展し広島藩きっての裕福な村と言われ

るよおになったのである。これを機に広村の為政者が先述の広村地図を作らせたものと推察できる。しかしこれを嘲笑うかのごとく嘉永6年、ペルーの黒船来航による国難と合わせるかのように数年間つづいた夏の長雨のため不作がつづき、年貢納入に事欠、安易に村債をもって年貢を納入するようになった。これ以後村債は戊辰戦役期(明治元年～同2年)の長雨にもたたられ雪だるま式に増えて行った。

やがて明治20年に村財政は破綻するのであるが、破綻の直接の原因は明治17年8月25日にこの地方を襲った台風である。当日の夜中7尺からの高潮により広村新開の堤防が悉く破れ400町歩に及ぶ田畑が3尺の海水に浸かって農地は海底同様に荒れ果てた(注2)。この400町歩はほぼ新開の全域であった。翌年6月、堤防は修復されたが塩抜きが思うように出来ず、特に明治18年には広村民が飢えに苦しむ状況であった(注3)。以来数年間広村民は塗炭の苦しみを味わったと記録されている(注4)。

この破綻した時のエピソードを1つ紹介したい。塩害で新開ではお米が全く取れなくなり秋祭りの時にも芋を飯がわりに食していた。祭り見物にやって来た他村の者が「広村の者はお祭りにも芋を食べている」と嘲笑った。それを聞いた広村の者は翌年から祭りの時に芋団子のまわりに色鮮やかに彩色したお米を貼付け、あたかもお米の団子を食べているように見せかけて食した。

これが広村の秋祭りに必ず販売される『いが餅』の始まりで現在はそのルーツも忘れ去られ「呉名物『いが餅』として芋でなく餅米の団子菓子として販売されている。

その後、潮抜きに10年の歳月を要したが広村は奇跡的に立ち直った。その一番の要因は明治22年隣町呉市に開廠された呉海軍工廠の度重なる拡張で人口が爆発的に増え呉市が一大消費都市になったことである。広村新開地の1町角に整然と整備された田園地帯で生産される蔬菜がそのまま呉市で消費された。これらによって村財政は好転し、税金を滞納する者のいない租税皆済村落として明治40年には広島県から模範村の表彰を受け、明治43年は内務省より同じく模範村として表彰されている。たとえば明治後期に模範村広村を視察した学者の視察記に蔬菜栽培で1反(300坪)当たり300円/年の収入を生んでいると報告される程の莫大な利益を上げていたのである(注5)。当時1000円で家が建つと言う時代であるから、この報告者が大げさな報告書を作ったとしてもかなりの収益があったと考えられる。明治40年代からはこの蔬菜が『甘藍』に代わって呉海軍工廠に納入(注6)されるのであるがこの甘藍で広村農業従事者はそれまで以上の利益を上げるようになるのである。

それではこの甘藍がどのようにして広村で栽培されるようになったのであろうか以下で検証したい。

甘藍の種の導入者

この甘藍の種を送ってきたのは広村の矢口亥之吉で、彼は明治8年広村大新開で生まれ満8才で広中央尋常小学校に入学し4

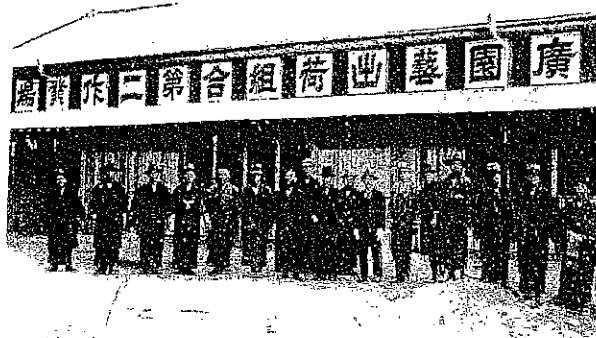
年後の12才で小学校を卒業し屋根職人の見習いをしていたが次男であることと屋根職人は高いところに登るので危ないと親に云われ、阿賀村の三好さんという人が米国へ移民するのに一緒に行く人を捜しているという話を聞きこの人の世話で5~6名一緒に米国へ移住した(注7)。この口伝を元に移住年月を計算すると明治20年と考えられる。「広島県史近代1」の広島県都市別・年度別官民移民数の表、賀茂郡の項に明治20年5人とあるのでこれに宛てると口伝がぴったりであるが、米国への最初の移民はハワイ島であったことから、この資料にあたるかどうかは確信が持てない。しかしこれは広村破綻の年であり亥之吉自身、実家の農業経営が塩害のため不振であったことも渡米した要因であったと思える。渡米したカルホルニアの沿岸の塩気のある畑で良く育っているキャベツを見て広村の窮状を救える品種と考えたのは想像できる。よって明治20年以後の早い年に甘藍の種が矢口亥之吉の父、矢口幸右衛門の所に送られて来たかと推測される。この甘藍は最初矢口家の柵内田で栽培されたと同家の人々に口伝されている。

よって明治20年代は甘藍が広村に根付いた時期といえる。

甘藍の品種改良者

海水に浸り潮抜きが完全に出来ていない新開でもこの甘藍は良く育ち、生食に適した品種であったことから、拡張される呉海軍工廠工員のための冬期の洋食青物となり、いわゆる近郊作物としてひっぱりだこで買い上げられた。これは玉木伊之吉という広村村会議員で農業の指導者が「広園芸出荷

組合」を組織し品種改良を毎年こつこつと行って市場性の高い高品質の甘藍を作り上げたからに他ならない。この玉木伊之吉は慶応2年(1866)広村吉松生まれで、甘藍の種を送って来た矢口亥之吉より9才年上である。玉木伊之吉の業績はそのお孫さんである浜本美智子女史によってよく資料・写真が保存されており当会会報第87号に発表されている(注8)。



大正8年に設立された広園芸出荷組合第二作業所前で
他村から「甘藍」栽培を視察に来た見学者との記念写真。
この作業所は船津神社鳥居東側にあった。



大新聞の「甘藍」畑で視察者との記念写真。

甘藍栽培の推定年号

この矢口亥之吉の渡米年月を換算すると広村での甘藍栽培は明治20年以降であったと考えられ、農業書により明治16年には

すでに栽培され広島甘藍と唱えられていたという記述には疑問を持つ。また、玉木伊之吉現存資料を考察しても広甘藍が世間で品質良好と評判を得るのは明治44年が初見であることから明治20年以前を甘藍事始に比定するには無理があろう。

品種は「米国产種のサクセッション」と考えられ玉木伊之吉の品種改良方法はその年の作柄の良好(形状の良い物)な甘藍を、種を取るためだけの農地に植え替え種を採取する方法であったため品種改良には時間が必要で競争に勝つ品種に育てるまでには10年以上の歳月を要したと考えられる。この品種改良の時期は明治30年代と推測でき、その後の広村では園芸出荷組合で公的に採集された種を一般組合員に配布して甘藍栽培を行った。この方法で良質な甘藍を「広甘藍」と称して出荷することができたのである。

以上の考察から広甘藍が栽培されたのは、おおよそ明治20年の早期であったと推察出来る。

以上が「広甘藍事始」として提起する論拠と考え得るものである。

また甘藍は日露戦役(明治37年(1904)~同38年)の時には軍艦に積んで中国の大連にまで運ばれたと言われている。甘藍は日持ち(保存)がきく特性と輸送には空袋に詰め「1俵8貫目」の梱包にして積み上げて痛まなかった。

また「広甘藍」は生食で非常においしいという品種に改良されており調理が簡単で冬場の青物として栄養学上も貴重であった。

広村では隣町の呉市に海軍と海軍工廠ができ、この一大消費都市が保存ができ輸送が便利で調理が簡単という「甘藍」を冬場

の青物として選んでくれたのが栽培する最大の要因と考えられる。

また呉市の近郊では広村以外「甘藍」を栽培できる地域が無く、このため無競争で呉海軍工廠へ納入ができ、大きな利益が得られたのである。

おわりに

明治20年広村戸長に就任し明治22年の町村制移行と共に初代広村長になった藤田讓夫翁の名行政で広島県下一の難村と言われた広村が莫大な借金(村債)を完済したばかりか租税を滞納する者が一人としていない裕福な村落に改革し、日露戦役後の外債支払いに窮していた日本政府租税政策の宣伝材料として施行された模範村制度で明治44年には内務省より模範村表彰されるに至った経緯を当時の学者たちによって調査研究され、この地方自治の奇跡の原因として藤田讓夫広村長と共に、3名が取り上げられ詳しく記述され残されている。

- ①、藤田讓夫広村長：長期的展望を立て村の基本財産を積み立てて行く政策。毎年月々に積み立てた預金の利息だけで村財政の1/2を賄おうと考えた途方もない理想的な計画。
- ②、広村助役の岩西健造：統計学を駆使して村財政の将来の予測と計画を立案する。
- ③、広尋常高等小学校長の村越隆寛：青年会・処女会を作り婚因するまでの青少年と少女に教育は学校だけでなく卒業しても正しく指導するべきと唱え各地区に訓導(当時の小学校の先生)が主となり夜間教育に出かけた。これによって広村には不良少年・無頼の徒とい

われる者が一人もいなかったという。

- ④、長浜専徳寺の大洲順道：教育とは生涯行うものとして仏教(真宗)を通じて村落各地域に出かけ生涯教育を行った。この中で租税はお国のため進んで払いましょうと国の施策に沿った教えを説いた。

以上の4名に付いてはこれまで広村が天下の模範村としてその名が全国に知れ渡った時にその立て役者として紹介されて来たが広村の発展を語る時にこの4名だけ注目されれば良かったのであろうか……。その後、広村がたえまなく発展して行ったのはそれにつづく人々が居たからに他ならない。その意味で今回、農業家2名に着目した。

- ⑤、矢口亥之吉：明治20年米国へ移住して塩害で困窮している広村のために潮に強いキャベツ(甘藍)の種を広村の実家に送ってきた。

- ⑥、玉木伊之吉：甘藍の品種改良に努め大正8年「広園芸出荷組合」を組織しその組合長として450余軒の組合員をまとめて「広甘藍」を全国に知れ渡る名産品に育て上げた。

当時の広村の主要産業は何と言っても新開地に開墾され1町角に整然と区画整理された農地で生産される農作物であった。明治17年の台風で全滅した新開の農地を復活させ塩に強い甘藍を根付かせた玉木伊之吉翁の農業への絶え間ない努力と精進によって莫大な利益を得る事が出来なければ広村の発展は無かったと言えるであろう。また、この種を明治20年に米国へ移住して広村の実家矢口幸右衛門の所に送って来た矢口亥之吉翁の先見の明が有ってこそと言え

る。広村民に経済的利益をもたらし一軒一軒の農家が裕福に成らなければどのような精神的な教育を施して立派な企画計画を立案しても豊かな村落（模範村にも）にはならなかったであろう。その面で今回紹介した2名の貢献も忘れてはならないと考えるものである。

注1、「広島農業第9巻・第1号」広甘藍の栽培、沖森当著（昭和31年1月1日発行）このなかに呉市広町で「キャベツが栽培されたのは明治38年頃で古老の伝言によれば現在の広甘藍は大正初期玉木伊之吉氏を中心に5～6名の熱心な栽培者が集まり、サクセション及びブレンダーゴから淘汰改良したもので「広甘藍」と命名され（後略）たとある。また「食文化雑考(52)」広島特産の由来～その4～広甘藍、神田三亀男著。これによれば広甘藍の原種といえるものは広村の精農家玉木伊之吉が大阪の種苗商より入れたサクセションとブレンダーゴの2種を自然優性交配し選抜淘汰された新品種と述べ、導入が明治37～38年頃としている。このようななか、同著に明治16年には栽培されており最初、広島甘藍と唱えられていたという記事も掲載されている。

注2、「『藤田家文書』D-1 堤防破壊ニ付松木並ニ石材払い下願」の6頁に八月廿五日非常ノ暴風激波ノ為メ村内諸堤防悉皆破壊為メニ耕地四百町余歩諸作皆枯死一体海面ト相成爲（後略）とある。また同文書10頁「造林下草一時刈取願」にもほぼ同文の記述が有る。

注3、「『藤田家文書』A-6 県丙第三十八号

達ニ依リ取調書文書」の2頁に「明治十八年民庶飢ニ迫ルモノ多キカ故ニ倉穀ヲ出シテ之レヲ賑ハス」とある。これは明治17年の台風被害の後は新開農地が海底の如くに荒れ果てただちに堤防の修復は起工したが竣工が翌18年6月までかかり、それ以後も塩害のため作物が育たなかった。このような状況下で特に明治18年は広村民が飢えに苦しむような状況に陥っていた。

注4、膺懲碑（ようちょうひ）広名田1丁目に明治18年5月に建立された石碑。碑文に去年の秋（明治17年）8月25日午後10時猛烈な台風によって新開の堤防が悉く崩れ大被害を被ったが翌年にはよく復興したとしてこの記録を残すため戸長・有田欠の発起によって建立された。（碑文の詳細は『広のいしぶみをたずねて』広郷土史研究会編、2004年12月吉日発行8頁を参照下さい）

注5、『自治研究資料広村視察記』大阪天王寺師範学校長、村田宇一郎著（明治43年11月発行）著者は広中央尋常小学校長村越隆寛と同窓の広島師範学校を卒業しており広村とも関係が深かった。またこの著書は明治43年発刊で広村が広島県より模範村表彰された3年後である。著者は広村模範村表彰の要因として近郊農作物「蔬菜」を上げ、この栽培で1反歩より300円の収入を得ていたと記している。これは当時数年の収入で持ち家が建つほどの高収入である。

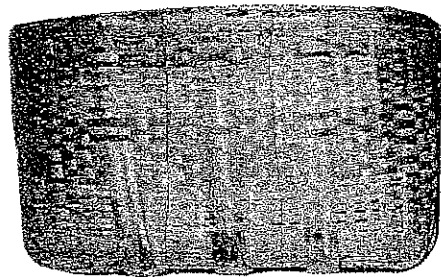
注6、矢口一美氏口伝による呉海軍工廠への甘藍納入の状況とは、広村でもまだ数軒しか電話が引かれていなかった広尋常小学校前の幸右衛門の長男唯次郎が始めた文房具店「朝陽館」へ呉海軍工廠より「明日朝何時に何百貫の甘藍を持って来い」と電話

がかかるとすぐさま畑に行き夜を徹してでも甘藍をバナナ籠(注A)を使って収穫し、牛の引く荷馬車(注B)の中に竹籠(注C)6箱を並べてその中に甘藍を入れて積み込み、上にシートを掛けて畑中の倉庫に保管しておく。納入日は暗いうちから荷馬車の前に提灯を灯し、6台~10台(両谷・白石・吉松・大新開から各1台~2台)の荷馬車が行列を作り馬踏幅8尺の旧県道3等線の呉越峠を通過して蔵本通り中央付近の堺川そばで「とうせん場」という所へ定刻前には到着しておいて、時間になると工場関係者の指示に従いここに係船されている小船にバナナ籠に積み替え計量を確認して納入を終える。支払いは15日締めで月に2回現金で支払われた。納入が終わると呉市街で人糞を購入して帰途に付く。往路、呉越峠の呉側の中腹には「飼い葉」を商っている店があり、そこで飼い葉(おから入)を仕入れ荷馬車の前に吊り下げて呉市街に入る。これを甘藍を納入している間に牛に食べさせておく。そうしなければ牛が帰途で呉越峠を越える元気が無くなるとのことであった。月2回の支払い日に広村の人は呉市街で買い物をしていたが、この現金を当て込んだ呉市側の商人が執拗な袖引きをしていたと言う。この頃はまだ甘藍納入は広村の農業従事者の談合の寄り合いグループで行っていたが、やがて「広園芸出荷組合」が大正8年設立され組織的に納入されるようになった。

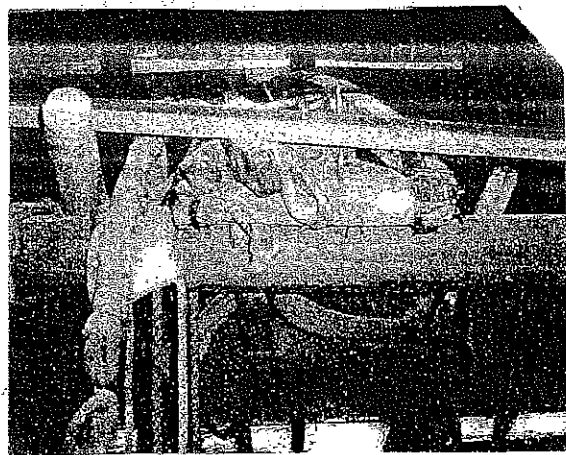
注A、バナナ籠：当時台湾からバナナを輸入する時使用されていた竹編み籠で直径60cm×高さ60cm程の円柱形の竹籠。左右に手を入れて持ちやすいよう取手穴を開けたもの。

甘藍約20kg入った。海軍工場にはバナナ籠が多くあり、工場内の甘藍配送にはもっぱらバナナ籠が使われた。

注B、荷馬車：幅3尺(90cm)長さ12尺(360cm)程の大きさと鉄車輪を4輪つけた荷馬車で鉄車輪の幅は振動を少なくするため普通の半分程度の幅の物を付けていた。



注Bに乗せる竹籠(注C)、現在も矢口一美氏宅の納屋2階に保管してある。



矢口家の納屋に保管してある牛馬車に使った牛の鞍。

注C、竹籠：甘藍を搬送する牛馬車の荷台に合わせて作った角形竹籠で荷台に6個並べて使用する。大きさ90cm×60cm×高さ60cm程の竹編み籠。バナナ籠3盃分、約60kg入った。荷馬車に竹籠平積で60kg×

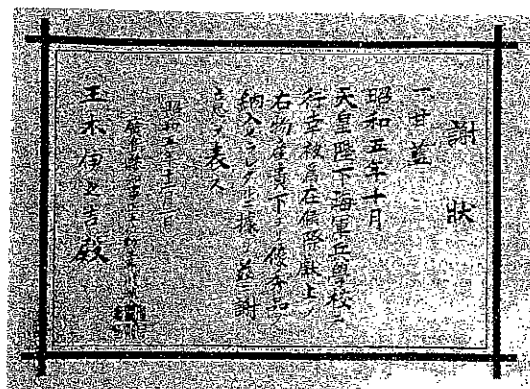
6箱=360kg程となる。納入時は竹籠に山盛りに積で上からシートをかぶせて押さえ甘藍が移動中に動かないよう固定した。

〔注7〕、矢口幸右衛門の次男、矢口亥之吉が移住した場所はアメリカ合衆国カルホルニア州ロサンゼルス郡ガーデナ街であった。当時、戸籍は日本に置いたままの移住であった。

〔注8〕、「広郷土史研究会会報第87号」広村甘藍（キャベツ）栽培の普及と広園芸出荷組合、祖父・玉木伊之吉の思い出、浜本美智子著。（平成20年9月1日発行）玉木伊之吉は広村の村会議員として広村の農業生産に指導的役割をよく果たし広園芸出荷組合の組合長として450軒余の甘藍栽培農家をまとめ率先して品種改良に努めた。その方法等は会報を参照願えればと考える。特質すべきは大正皇后陛下・昭和天皇陛下に広甘藍の献上指示を広島県当局から受け、つつがなく納品して謝状を受けていることであろう。ただ農会などで広甘藍が最初に賞を受けるのは同家所蔵の資料からでは明治44年が初見である。



玉木伊之吉翁が昭和天皇陛下に献上した甘藍は注連縄を張った畑で下肥を施さずに栽培した。



昭和5年、天皇陛下に「甘藍」を献上して頂いた謝状。

〔参考〕、矢口幸右衛門の長男・唯次郎（明治4年生）のもとに他家・玉木保三郎の長女ミチヨが嫁いでおり矢口家と玉木家は親戚として甘藍栽培を同グループで行っていた。

その他の参考文献

- ①、「広郷土史研究会会報第84号」広甘藍栽培のルーツと矢口家系譜の関係、矢口一美著。（平成20年3月15日発行）矢口家の系図を示し、米国へ移住した矢口亥之吉翁が「広甘藍」の種を送ってきた事実を伝えている。
- ②、「広郷土史研究会会報第90号」広甘藍ものがたり、小栗康治著。（平成21年3月21日発行）広甘藍のこれまでの研究成果をまとめたもの。
- ③、正籐董一編『自治研究資料広村視察記』（正籐尚文堂、明治43年）
- ④、内務省地方局編『地方行政史料小鑑』（報徳会、明治44年）
- ⑤、平原唯順編『広村の自治と宗教』（興教書院、大正元年）
- ⑦、武岡充忠・井口丑二編『広村』（警眼社、大正4年）
- ⑧、吳新興日報社編『大呉市民史（明治編）』（吳新興日報社、昭和18年）

大新開 矢口家の系譜と矢口亥之吉「甘藍」関係年表

西暦	和暦	月日	記 事
1185	文治元年	3月	壇の浦で平家滅亡。
1192	建久3年	1月	源頼朝征夷大將軍になる。
1274	文永11年	10月	文永の役 元・高麗の軍、博多に上陸 武田氏安芸国守護として東国武士を率いて銀山城へ入る。 福島氏これに従う。(大新開矢口氏祖先)
1541	天文10年	5月	安芸国武田氏大内氏に攻められ滅ぶ。
1543	天文12年		武田氏一族伴氏、毛利元就に攻められ滅ぶ。 福島氏、毛利元就に従う。
1600	天正 慶長5年		福島大和守広島城築城に毛利輝元に従い尽力する。 関が原の合戦、毛利輝元西軍に味方して敗軍、萩へ移る。 福島正則広島城へ芸備50万石の太守として入城。 福島大和守、輝元に従わず矢口村へ残る。
1689	元禄2年 元禄年間	6月	広島藩、広村大新開134町歩を築調。 矢口庄左衛門、矢口村より大新開の名請人として広村へ来住。 船上の山奥に小祠を建立して天文12年伴城落城時使用の刀を奉納。
1735	享保20年 幕末		船津山に広村社を建立。(船津八幡宮) 広島藩に銀を献上して与頭同格・庄屋同格・苗字帯刀を許可される。
1875	明治8年	2月7日	矢口亥之吉、広村大新開で矢口幸右衛門の次男として生まれる。
1883	明治16年	4月	亥之吉、広中央尋常小学校へ入学。
1887	明治20年 明治20年 明治20年代	3月	亥之吉、同小学校を卒業、藁葺き屋根職人の見習いになる。 亥之吉、阿賀村の三好氏に付いて米国加州へ移住。 米国よりキャベツ(甘藍)の種を実家幸右衛門の所へ送る。
1955	昭和30年	1月21日	矢口亥之吉、本籍地にて死亡。

矢口幸右衛門 — 唯次郎
— 亥之吉
— 幸美 — 一美(広甘藍の証言者)



矢口亥之吉翁の遺影
没、満81才、順心信士

玉木伊之吉 広村「甘藍」関係年表

西暦	和暦	月日	記事	宛名
1697	元禄10年	11月	森美作守 家来玉木理左衛門重朝浪人 津山府 椿高下より広に来住。	
1866	慶応2年	9月3日	玉木伊之吉、広村で生まれる。	
1908	明治41年	5月9日	「褒状」第6回稲苗代品評会で第壹等賞を得る。 (広村農会長藤田譲夫より)	玉木伊之吉
1911	明治44年	12月28日	「甘藍及葱」広島市安芸郡安佐郡聯合農産物品評会 へ出品し謝状を得る。(広島市長長屋謙二より)	玉木伊之吉
1912	大正元年	12月20日	「甘藍」第3回賀茂郡園芸品評会で壹等賞を得る。 (広島県農会長中村純九郎より)	玉木伊之吉
1919	大正8年		広園芸組合を組織し玉木伊之吉組合長となる。	
1922	大正11年	4月5日	「甘藍」大正11年3月皇后陛下本県に行啓の際 御用を仰せ付けられる。(広島県より)	玉木伊之吉
1930	昭和5年	12月1日	「謝状・甘藍」昭和5年10月天皇陛下海軍兵学校に 行幸時右品を献上し謝状を得る。(広島県知事より)	玉木伊之吉
1930	昭和5年	12月1日	「甘藍」昭和5年10月海軍兵学校に行幸の際御用を 仰せ付けられる。(広島県より)	玉木伊之吉
1932	昭和7年		「広甘藍」東京青果市場へ納入を開始する。	
1933	昭和8年	2月11日	大正8年園芸組合を組織し組合長に任じられ 組合発展に努力した功により感謝状を得る。 (中央園芸組合より)	玉木伊之吉
1937	昭和12年	10月1日	広甘藍の生産販売に業績を上げたことにより 感謝状を得る。(東京中央青果株式会社他6社より)	広園芸出荷組合
1937	昭和12年	10月1日	「広甘藍」改良・販売統制の事業に功績にて 表彰状を得る。(東京中央青果株式会社他6社より)	玉木伊之吉
1938	昭和13年	5月22日	広村会議員・区長・水利組合議員・産業調査員 等の公職に付き自治の開発に貢献し表彰される。 (広村長森岡多吉より)	玉木伊之吉
1957	昭和32年	3月20日	玉木伊之吉、没。	

玉木伊之吉 — 高市
— ヨシコ
— 嘉六 — 冷子
— 美智子(浜本) 資料保存者



晩年の玉木伊之吉翁
没、満92才、淨泉院順照